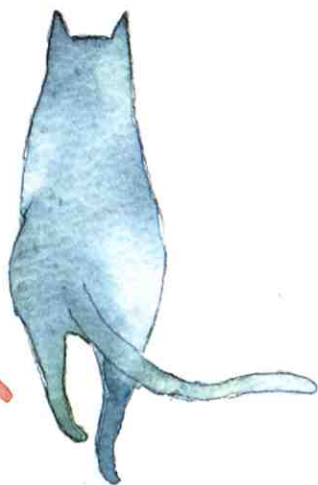


猫の花嫁



真野
美樹

絵
社
えりか

むかし尾道に、有名な茶屋で働く看板娘が
おりました。氣立てのやさしい娘で、よく野
良猫に餌をやっていました。そのうち、一匹
の黒猫が娘に特になつくようになりました。朝
茶屋の前に娘が立つと、いつの間にかやって
きて、娘のそばに座っています。注文を取る
ために歩き出すと、離れまいと後をつけてい
きます。客が黒猫に触ろうとすると、さっと
避けて、娘の足にすりよるのです。

夕方になると、漁師をしている娘の幼なじ
みが、小魚を数匹持ってきてくれました。幼
なじみの若者は猫が好きで、いつも小魚をや
ろうとするのですが、黒猫はそっぽをむいて
食べようとはしませんでした。見かねて、娘
が小魚を差し出すと、黒猫は喜んで食べました。
若者はそのたびに肩を落としましたが、何も
言わずに、次の日も小魚を持ってやってくる
のでした。



一方、茶屋の主人は困っていました。常連
客に猫が大嫌いな浪人がいたのです。浪人は
手柄を立てて、どこかの藩に取り立ててもら
おうと思っていました。そこで、尾道で噂さ
れている化け猫を退治しようと思ったのです



が、見つかりません。くたびれた浪人は、いつも茶屋にやってきました。注文を取りに来た娘を引き止めると、猫がいかにも悪い生き物かを言い聞かせます。黒猫が足元に近寄ってくる、とたんに不機嫌になって、足を使って追い払っていました。そして、帰る前になると、主人に必ず、黒猫を追い出すように文句をつけます。これが毎日続いたので、主人は無視することが難しくなってきました。

そこで、主人は娘に黒猫の飼い主を探すように言いました。娘は、しぶしぶ頷きました。

娘は、一晩考えて、幼なじみの若者に相談しました。可愛がつてくれるだろうし、寂しくなったら会いにいけるからでした。若者は快く引き受けました。

これを聞いた娘は安心しました。足元にいた黒猫をそっと抱き上げて、渡そうとしましたが、黒猫は嫌がりました。娘の腕の中に飛びこんで、抱えようと伸ばした若者の手を、

散々引つかきました。しかし、「ええ子じゃけえ、言うこと聞いて？」と娘に言われると、途端におとなしくなりました。若者は、明日、黒猫をつれて会いに来ると約束して別れました。黒猫は、若者の肩に前足を置くと首を精一杯伸ばして、ずっと娘を見つめていました。



その夜、浪人は、化け猫を探して外に出ました。提灯を持ち、猫はいないかと地面を照らしていました。尾道に来てから一ヶ月、手がかりは見つからず、路銀が残り少なくなっていました。途方にくれた浪人は、野良猫を斬って化け猫に仕立て上げようとたくらんだのです。いつでも斬れるように、片方の手は刀に添えられていました。

町中を歩きましたが、月のない夜だったので、猫を見つけないのは至難の業でした。浪人はだんだん疲れてきました。今日はもうこの辺でやめようか、と思っていると、猫のうなり声を聞きました。声は、大人一人分ほどの幅しかない路地から聞こえてきました。しめた、と思つて提灯を向けると、地を這うような低い声が「邪魔をするな。去れ」と響きました。いきなりのことだったので、浪人は思わず提灯を取り落としてしまいました。暗闇には、二つの目が黄金色に光っています。まさか、本当の化け猫に会うとは思わなかったので、

浪人は悲鳴を上げました。刀を抜いて、めっちゃくちゃに振り回しました。確かに肉を斬った感触が手にありましたが、うなり声はまだ聞こえてきます。焦った浪人は渾身の力で刀を振り上げました。そのとき、暗闇から嵐のような強風が浪人を襲いました。吹き飛ばされた拍子に刀がどこかへ飛んでいきます。刀を失った浪人は、一目散に逃げだしました。

その夜、幼なじみの若者は奇妙な夢を見ました。若者は、昼間の茶屋を訪れていました。しかし、若者以外の人影は見当たりませんでした。首をかしげていると、足元に気配を感じました。黒猫が、足にすりよっていました。若者は、今までの苦勞がやつと報われたのかと、頭をなでようと思いました。すると、出した手を引っかかれました。がっかりしましたが、茶屋に迷惑がかかってしまうと思い、無理やり黒猫を抱きかかえました。黒猫は、抵抗しながら悲しそうに鳴きだしました。若者はすっ

かり困ってしまったって、赤子をあやすように黒猫を揺らしました。

抱きかかえられた黒猫は、腕の中で丸くなつて、顔を見せてくれませんでした。ともかく、今のうちに帰ろうと、若者は歩き出しました。すると、地を這うような低い声が「もう、お前にしか頼めない」と呼びかけました。そして、いつのまにか、腕の中の黒猫がいなくなっていました。驚いて周囲を見回すと、外にあって腰掛に、花嫁衣裳に身を包んだ女人が座っていました。若者は、女人に聞いてみようと、思い、声をかけながら顔を覗きこみました。女人は、幼なじみの娘でした。

「花嫁を頼む」

若者は、そこで目を覚ましました。夢のせいで黒猫が気になって仕方がありません。昨日寝ていた場所にはいなかったので、男は家中を捜しました。どこにもいないので、若者

は外に出ました。黒猫は縁側の下に、傷だらけで横たわっていました。息をしていませんでした。

若者は娘に夢の出来事を話し、黒猫のお墓を作りました。そして、二人は夫婦となり、幸せに暮らしました。以来、尾道ではよく野良猫に懐かれる娘に、はよいい人を見つけないと、猫が花嫁に取ってしまうよ、と言うようになってきた。



